

ベルギーからの便り

赤間 峰子

今年の三月末に私の従妹が主人の勤めの関係でベルギーのブリュッセルへ参りました。三、四年の予定で中学二年の男の子と小学校六年の女の子を連れて行きました。大学を出てしばらくNHKのアナウンサーなどをしていた関係で、案外おもしろい話がきけるのではないかと頼んでおきました。やっと落付いたと六月半ばごろにきた手紙はなかなか考えさせることもありましたのでご紹介いたします。

* * * * *

私もようやく毎日の買物など、ようすがわかって不自由なく手に入るようになり、少し電車やバスで市内の遠出などもできるようになりました。お肉の薄切りがスーパーなどになくて困りましたが、「機械で薄切り」というと切ってくれる店を教わり、

それ以来バタ焼きでも生が焼きでも食べられるようになりました。こちらは電車もバスも、地下駅（ベルギーは半地下鉄といつて、ところどころ地下にもぐって駅があるのです）を除いて駅の名前がないので、お客はキヨロキヨロ外を見て、自分の降りる手前でボタンを押して降りるのです。だから、初めての所へ、電車をたよりに行くのはとてもムリ、変な国です。

おたずねの幼児教育のこと、正直いってまだよくわからないのです。自分の子どもをこちらの幼稚園にでも入れてみると、いろいろわかるのでしようけれどね。ただ、感想程度ですが、何か、社会全体に根強く根をおろしている、伝統的なモラルみたいなものは、基本的にあらゆる人がもっているみたいです。貧富の差にかかわらず……

表1 各条件群における実験手続き

	セッション1 5分間	セッション2 6分間	セッション3 5分間	セッション4 6分間
遊び群	自由遊び	用途テスト (第1回)	自由遊び	用途テスト (第2回)
模倣群	模倣運動	用途テスト	自由遊び	用途テスト
コントロール群		用途テスト	自由遊び	用途テスト

。カンリックの精神的風土がそうさせるのかどうかわかりませんが、たとえほん

な小さな子どもでも、何かちょっとしてあげる（ドアをおさえるとか、その程度）と必ず、「メルシー、マダム」というし、若くてオートバイをぶつとばしているようなお兄さんでも、道を聞くととても丁寧に「わかりましたか、これでよろしいですか？ マダム」というように答えてくれたり、ほんの二、三の例ですが、東京の駅の改札口で先を争って出る男性に、二、三度ぶつとばされた経験のある私はいたく感激（？）して笑われました。家具の配達人だの運送屋のオジサンだの（この辺は割合貧しい部類の人たちもいます）にはビールを出してチップというのがこちらの通例だそうで、そうしますと必ずグラスをあげて、「マダム、ご健康を」といいます。だから多分小さい時から、こういう基本的マナーとか何とかは、ちゃんと当り前のこととして教

えられているのでしようが、気持ちがいいです。

その反面、かなり大きくなって（小学校の高学年）も指しゃぶりをする子がいたり、勉強などはこちらの公立校はのんびりとしていて、日本人の子が中途から入ると、最初は言葉がわからないけれどなれてくると、数学は必ず上位の成績がとれるとか、いろいろあるわけです。日本でも最近、学校の問題がいろいろいわれ出しているみたいですが、この学校教育のさまざまな問題が、すべて幼児教育の分野にまで影をひいて、種々の問題をなげかけているのじゃないかと―私自身、日本では自分の子どもを公立と私立に通わせてみて、そのあまりの違いにガク、然として、日本の小、中（高校も多分）教育にいいことがゴマンとあるので―思うわけです。で、それを更にたどって行くと、日本の社会の学歴主義とか、そういうものにどうしても突きあ

たることになりそうです。ほとんどの親が、表面はとも立派なことをいっていても「何とか自分の子どもだけは他の子よりもいい学校に、いい大学に」なんて生まれた時から考えていては、基本的人間のしつてもマナーもなくなっちゃいそうな気がします。「海外子女教育」という月刊誌の中のある母親の意見は、ある点でまともをついていると思います。

もうひとつ、幼児に影響が大きいと思われるマス・メディアに、日本とヨーロッパと大きな差があると思います。こちらのT・Vは本当に地味で、日本みたいに昼間からスター何とかの歌謡曲だの、深夜のこれでもかこれでもか式のきわどい番組は皆無で、T・V自体もまだ、各家庭どこにもあるというわけではないそうです。ましてどぎつい怪獣殺りく番組だの「××マン」だのななし。ヨーロッパの子どもにあの怪獣がひどい目にあうのをみせたら「こ

わい」というんじゃないかと思えます。公園で石を投げる子もいないから白鳥も寄って来て手からパンを食べるし、やっぱりどこか違いますね。マンガ雑誌も日本やアメリカ式のものはありません。まして日本のエロ・グロ少年雑誌や週刊誌もなし。成人向けは（ベルギーのではありませんが）それはそれで別で、幼児の目にふれるものに関しては、安心していられるみたいです。日本は父親や母親が女性週刊誌をおもしろがって見てボンとその辺においておく、なんていう家庭もあるみたいだから、子どももロクなことを覚えないうしょう。やはり親自体も考える必要がありそうです。一流高校、一流大学を出なくても、一人の立派な人間として職業につけばそれはそれでいい、と日本の親はなかなか悟れないみたいですね。私自身大してご期待にそうほどの意見も申上げられないので前記の雑誌二ページほど同封しておきます。

この「海外子女教育」という雑誌の二ページを見て私は、あらためてびっくりしました。以前に、当時ブラジルから帰国されたご長男の幼稚園入園のことで頭を悩ませられ、率直なご意見を当時のお茶の水附属幼稚園々々長周郷先生に手紙を送られた羽田令子さんの文章だったのです。あのお手紙は周郷先生が非常に感激されて、「ある意味で日本の教育の欠かんをついている」と雑誌に掲載することにしてお許しも得ました。ここに書かれていることも大体同じ趣旨ですがごくかいつまんで引用させていただきます。

* * * * *

父親の転勤に伴い、子どもが転校をくり返したので、その間母親の私はいやでも比較教育を肌で学んでいたことになる。ブラジルでのアメリカン・スクール、日本の地方の公立校、東京の私立校、海外の日本人学校、それぞれの教育に対する感想はいっ

ぱいあるが、一つだけ印象に残っていることがある。それは日本の教育の欠陥ともいえるが、私は「愛の教育」というものについてつくづく考えているのである。（中略）
帰国した暁に、しばらく離れていた日本の教育を見て私は、その違いに驚かされた。政府はGNPに酔い、先進国に伍すため、いや先進国を追い抜く錯覚に突走り、理科教育の増強を叫び、学校教育は学習にのみ傾いて進学体制一筋になってしまっていた。教師と子どもたちとの真のふれ合い、そこから得る人間らしきもの、そんなものをつかむ余裕などないように見受けられた。

私は自分の受けてきた過去の教育、外国で見たもの、そしてわが子が接している学校を比較してみても、教育にまず大事なものは何か、教育の真の意義はどこにあるのか、に気づかされたのである。羽田 令子
（「海外子女教育」海外子女教育振興財団）